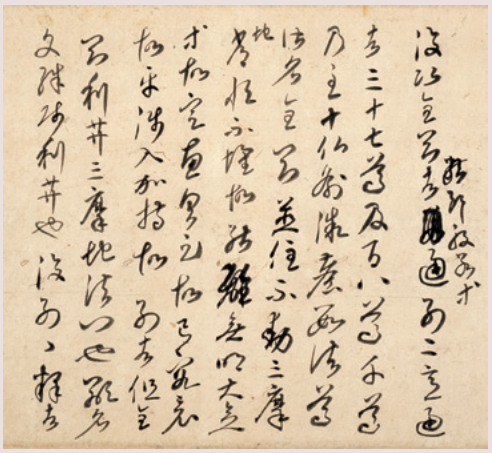
話題

空海の草書

当館学芸部研究員　樋笠逸人

弘法大師空海の超人的な能力を語る数々の伝説のなかにも、事実の一端を伝えるものがある。空海は、両手両足と口で同時に五本の筆を操ったことから、「五筆和尚」と呼ばれたという。この曲芸のような空海の技は、もちろん後世の誇張であろうが、空海が唐に留学してからおよそ五十年後、福州の開元寺を訪れた入唐僧の円珍は、かの地で空海が「五筆和尚」の名で知られていたことを記録している（小野勝年『入唐求法行歴の研究』）。「五筆和尚」というのは本来、篆書・隷書・楷書・行書・草書の五つの書体を、空海が自在に使いこなしたことを意味する呼び名だったと考えられている。

四月十三日より開催する特別展「空海　KŪKAI―密教のルーツとマンダラ世界」では、空海の書の名品が一堂に会する。まさに「五筆」の面目躍如たる多彩な書は、その全体像を語り尽くすのがとても難しい。ここでは「五筆」のなかで一つだけ、空海の草書の画期性について触れてみたい。



国宝　金剛般若経開題残巻（部分　京都国立博物館）

空海の草書の代表作である「金剛般若経開題」は、あらゆる執着を断ち切る智慧を説く経典『金剛般若経』の奥旨を示した解説書。軽妙ながらも力強い筆運びでしたためられた文字は、ところどころに加筆修正があり、空海が文章を推敲しながら書き進めた草稿本であることが知られる。つまり草書は空海にとって、思考を妨げずに速記できる自然体の書であったようだ。しかもその字形は自己流に書き崩したようなものではなく、王羲之の書風を基礎とし、唐代の書法に学んだ本格的な草書体である（加藤詩乃「空海の草書体―平安時代初期における草書体の受容について―」）。

空海が在唐中に書写・収集した密教典籍の冊子集「三十帖冊子」（京都・仁和寺蔵）にも、熟練した草書がみられる。いくつかの筆跡が混在し、唐の写経生も加わって書写したとされる「三十帖冊子」であるが、なかでも空海自筆と認められる第二十帖は、途中で楷書から行書・草書へと書体が変化する。その切り替えはぎこちなさが全くなく、まるでプロドライバーのギアチェンジのように、スムーズに筆が加速していく。通常、写経は謹厳な楷書で書写されるが、空海は限られた時間で多くの経典を書写するために、草書を積極的に用いたとみられる。これが長安に滞在していた八〇五年頃に書写したものだとすると、空海は三十二歳にして、草書を本格的に体得していたことになる。

このことはわが国の書道史上、画期的な進歩であったといえる。正倉院に伝わる『国家珍宝帳』には、聖武天皇の遺愛品として王羲之の「草書巻」が記載されているように、奈良時代には草書の手本が中国から日本にもたらされていた。しかし正倉院文書にみられる書風を分析した研究によると、奈良時代には字形が単純な一部の草書が用いられているものの、本格的な草書はほとんど定着していないという（内藤乾吉「正倉院古文書の書道史的研究」、黒田洋子「正倉院文書の「啓」・書状に見られる書の性格」）。当時の日本で普及していたのは、おもに楷書と行書、あるいはそれらを草書風に崩した書体であった。

草書は、楷書→行書→草書という順に字形を崩して成立した書体のように思われるが、そうではない。草書は行書と楷書の成立よりも早く、隷書を母体として、前漢時代の紀元前一世紀頃にその原型ができた。そのため草書には、楷書の姿からは想像がつかない字形や、筆順が根本的に異なる字形もある。楷書と行書を先に身につけた奈良時代の人びとにとって、草書の体得は難関であったと想像される。これに対して空海は、漢字の長い歴史に由来する文化のハードルを、いとも簡単に飛び越えてしまった。

空海は長安に滞在していたわずか一年の間に、インド出身の般若三蔵からサンスクリット語を学び、唐の高僧である青龍寺の恵果阿闍梨から密教の体系的な知識を伝授された。空海の自在な草書の書きぶりは、書の分野にとどまらない、空海のずば抜けた学習能力の高さを裏付けているかのようである。